

## 東京電力福島原子力発電所における事故調査・検証委員会 吉岡委員、柳田委員のプレゼン 議事概要

1. 日時： 平成23年7月8日（金）13：00～15：20

2. 出席者：

（委員等）畑村委員長、尾池委員、柿沼委員、高須委員、高野委員、  
田中委員、古川委員、柳田委員、吉岡委員、  
安部技術顧問、淵上技術顧問

3. 委員等からの主な質問・意見

○吉岡委員プレゼン「日本における原子力の歴史」

【尾池委員】

- ・ 科学技術とまとめて説明されていたが、科学と技術は別の概念。Science based technology とも取られる用語であり、技術中心で進めてきたのが問題。
- （吉岡委員）科学と技術では、そもそもベクトルが違う。
- ・ 批判勢力が1970年代にピークだったという説明だったが、過去、原子力、核エネルギーの専門家、学術的意味で反対している者の論理を知る必要がある。
- （吉岡委員）専門家の論理については整理していずれ情報提供する。

【高須委員】

- ・ 核エネルギー開発における「自主」の意味をどのように考えるのか。
- （吉岡委員）「民主」はイデオロギーで科学者を差別しないとの意味。「自主」は語義に近い。過去の核開発競争の中で、日本として平和利用を担保するためのものである。
- ・ 95年以降、つまり、V期とVI期間に、原子力に対する国際的関心が高まる「原子カルネサンス」の時期があったことを認識する必要。
- （吉岡委員）個人的には、原子カルネサンスは本当なのかどうかまだよくわからない。中国、インドの2か国ぐらいではないか。米国ではブッシュ大統領が作った枠組で予定された数基のみだし、仏国は、アレバの原子炉が失敗作であることがわかった。また、開発途上国では今回の福島での事故で冷水をあびたのではないか。

### 【柳田委員】

- ・ 原子力に賛成するか反対するか、いわば、白か黒かというような単純な話で、科学者の質を判断するような文化が育ったのはなぜか。
- （吉岡委員）90年度半ばでは、白か黒かだけでなく、新自由主義や無駄な公共工事を止めるべきなど多様な意見が出てきた。もんじゅ事故の後の円卓会議においても、推進や反対の考えを持った者同士で自由な意見交換をし、お互いの理解を深めることができた。今後は、より自由な議論を行うことが必要。
- ・ 傾斜生産方式のように、国が特定分野に肩入れして経済成長を図る考え方が、今の原子力政策につながっているのではないか。
- （吉岡委員）開発途上国型の経済政策は、時代によるが、今の時代にはそぐわない。過去、最新鋭の設備・機器を輸入に頼っていた時代は、貿易赤字が増加する中で外貨を節約する観点から、原子力を進めるべきとの論理があった。

### ○柳田委員プレゼン「事故調査のあり方～スリーマイル島原発事故等の事例から～」

#### 【畑村委員長】

- ・ 「組織事故」という重要な視点を提示頂いた。事故前の想定として、津波が来ることをどうして、基準やオペレーションで考慮しなかったのか。
- ・ 電源喪失後に、事故の進展が加速する中で、どう対処したのか。組織事故の視点でも見るべき。
- ・ 放射性物質の飛散の問題について、予測やシミュレーションを誰が行い、組織間の情報伝達等はどうなっていたのか、そのような視点での分析が必要。

#### 【高野委員】

- ・ 電源喪失後のベントや海水注水等について、現場の行動や本社・政府の意思疎通、意思決定も「組織事故」の概念に含まれるのか。
- （柳田委員）含まれる。例えば、TMIの事故の際も、ホットスポットに関する情報や、事故につながるかもしれないような危険な実験をどこでやるのかなどの検討状況を組織的に非公開にしていた。

※文責：東京電力福島原子力発電所における事故調査・検証委員会事務局